

「祈りの旅」を詩編と共に

——詩編 120～134——

牧野信成

「祈りの旅」

オリエンズ宗教研究所から出されている『詩編で祈る』という小冊子がある¹。第2バチカン公会議以降の典礼刷新運動を反省しながら、すべての信者に詩編を手渡す目的で編纂された、詩編を用いた祈祷書である。「詩編を祈るには翻訳するだけでは不十分である」「説明してもらわなければわからない祈祷は決して自分の祈りにはならない」と記された「まえがき」から教えられることは多い。この祈祷書は、現代の信者が自分の言葉にすることができるよう注意深く詩編を選択し翻訳したものであり、選んだ詩編を八つの主題に分け、全体が祈りの手引きになるよう配列に工夫が凝らされている。その構成には次のような解説が附される。

最初に、人について、その道や幸不幸、富と死などを考えさせる「知恵の詩」があり、次に神への信頼を深める詩が載せられてあります。後者はそのすぐ後に来る「罪とゆるしについての詩」及び「嘆願」を唱えることができるために、心を準備する役割を果しているのです。つまり、神へのいくらかの信頼がなければ、人は自分自身について、失望しないで素直に

認めることができず、また苦悩の中から神に叫ぶこともできないからです。続いて、祈る人自身はその視野を広めるように働きかける「神の民についての歌」があります。そして最後に、神のそばにおける喜びから来る慰めと感謝を通して、詩編を唱える人は、神をほめたたえるところまで導かれ「賛美」をもって、祈りの旅の目的地に着くのです。

ここで目されているのは、公的礼拝におけるリタージェーとしての祈祷ではなく、信仰者個人の私的生活における祈りである。個人の祈りがとりとめのない感情の吐露に終始し、力のない信心に埋没しないように、とは編者の述べるところだが、確かに詩編は、神の民に祈る言葉を与えて、その言葉によって民を嘆願へ向わせ、恵みに憩わせ、救いの確信と感謝と賛美へと引き上げる力を持っている。個人として祈りをささげる私的礼拝で、詩編が生ける神の言葉として信仰者の口を上り、魂に浸透してゆく時、祈る「わたし」は御言葉に共鳴しつつ、御言葉に従って魂（ネフェシュ）を造形される。詩編に則して言うならば、祈ることとは、祈りを学ぶことであり、祈るわたしになることである。この小冊子が示す祈りの手引きとしての詩編の用い方は、目新しい実例などではなく、聖書に含まれた書物としての詩編の本来のあり方と思われる。「詩編」の編纂を巡る歴史的な研究は他へ譲るが、そこで注目したいことは、詩編は幾つかの詩編を続けて読むことで、よき信仰の教導を果すという点である。上で引用した「まえがき」でも、「『賛美の詩』をもって、祈りの旅の目的地に着く」と言われるように、詩編には終りへ向う、ある流れがある。知恵で始まり、賛美で終わるとは、詩編1編で始まり、150編に至る「詩編」全体の流れにも相応する。祈りは気まぐれではなく、日々継続的になされる神への奉仕であるから、この流れを意識して詩編を祈ることは、実践の上でも聖書解釈の上でも重要と思われる。

「祈りの旅」という表現から連想されるのは、「詩編」に含まれた「巡礼歌集」であろう。新共同訳聖書では「都に上る歌」と翻訳された表題が付けられている詩編120～134編を指す。詩編の注解書は膨大な数に上るが、大抵は表題を重要視しないためか、これらの詩編が纏めて扱われる場合は極めて少ない。特に近代以降の学問的注解書では、各編の成立状況（「生活の座」）を

¹ J. ウマンス編『詩編で祈る』（オリエンズ宗教研究所、1979年）

明らかにし、そこに信仰の実存を定めようとするため、詩編は個々に扱われ分類されて、その正典的構造が有する文脈は無視されてしまう。しかし、七十人訳とマソラ本文では詩編の番号付け、即ち、結合の仕方が異なる場合があるように²、各編の前後関係にはよく注意してみる必要がある。そして、「都に上る歌」という表題のもとに纏められた一群の詩歌集をそうした観点の下で読み進めるならば、必ずしも無作為に配列されたものではないと思われるのである。以下、各編の詳細な注解は差し控えるが、要所を押さえながら、その全体の流れを素述して配列の意図に迫ってみたい。

120編「苦難から」³

- 1 巡礼歌（上る歌）
主にむかって、
わたしが苦しみの中で、
呼ばわると答えられた。
- 2 主よ、お救いください、わたしの魂を
偽る唇から、欺く舌から。
- 3 主は何をお前に与えよう、
何をお前に加えよう、欺く舌よ。
- 4 鋭い勇士の矢がいくつも、
えにしだの炭火とともに。
- 5 ああ、わたしの不幸は、

² 七十人訳では、9編と10編、114編と115編が一つに結合され、116編と147編が二つの詩編に分割されている。また、42編と43編が元来一つの詩編であったろうという点については、多くの写本や研究者たちの支持がある。

³ ここで掲げる詩編本文は私訳による。語釈や本文批評はいちいち記載しない。ヘブライ語本文はBHSにより、各種邦訳聖書、並びに注解書の類を参照している。翻訳に当たっての心がけとしては、出来るだけ簡潔な文体でヘブライ語本文の語勢やイメージを残しつつ、日本語の調子を整えたいと願ったが、結果としては逐語訳に近いものとなった。

- わたしがメシエクに留まるから、
ケダルの天幕とともに住むから。
- 6 長らくそこに住んでいる、わたしの魂、
平和を憎む者とともに。
- 7 まことにわたしが語るのは平和、
彼らは戦争へ向かう。

「都に上る歌」(שִׁיר הַמַּעְלוֹת)との表題は、直訳すれば「上る歌」とでもなるだろうが、123編で明瞭になるように、祝祭日にエルサレム神殿に参拝する者たちを念頭においた詩と思われる。また、126編には捕囚からの帰還というモチーフが登場し、離散民の巡礼の旅に歴史的・神学的意義が投影される。語の用法からすれば、エズラ記7章で「出発」と訳されている語が「上る」という語に相当し、それはエルサレムへ上京することを表すことから、「上る」は「巡礼」もしくは「巡礼者」としてよいであろう。伝統的なもう一つの捉え方からすると、「上る」という語が「階段」をも指すため、これら一連の詩篇は「階段詩篇」とも呼ばれる(七十人訳、カルヴァン注解参照)。これはエルサレム神殿の内陣から婦人の庭の間に設けられた15段の階段を指し、レビ人がその上でこの一連の詩篇を歌ったことに因んだ命名だと説明されるが(ミシュナー等)、聖書自身にはそうした根拠は見当たらない。詩篇の主題から鑑みて、「巡礼」のモチーフを背景に想定した方が無難であろう。

本文では、表題は特別に詩文本体と区別されている訳ではなく、朗唱される際には共に読まれたものと思われる。すると、本120篇の場合、表題と第一句との結びつきを考えたい。原文に即して訳せば、「詩、上る、主に向かって……」となり、ここに本篇が巡礼歌集の冒頭に置かれている理由も見出される。エルサレムを目指して巡礼の旅に出ることは、その歴史的背景をたとえ離れたとしても、主の道を歩む信仰者が主に向かって歩みを進める日常へと転換される。

1節で歌われる「呼ばわると答えられた」という導入が、本編では救いに至る終りにまで十分展開されていないことで多くの解釈者を困惑させている。しかし、それは本編をあくまでも独立した一編として理解しようとするこ

の限界であって、120編を15のアンソロジー全体の導入を果たす一編とすれば問題は解消される。主の答えは、続く121編からの各詩篇の待望の中に次第に明瞭な形をとり、つい神殿での礼拝賛美においてクライマックスに達する。

見てください、
なんと良いことでしょう、
なんと麗しいことでしょう、
兄弟たちが一つになって座るのは。
・ ・ ・ ・ ・
まことにそこで、
主は祝福を命じられました、
永遠に至る命を。

(133編1節、3節)

すると冒頭120編の主題は巡礼に旅立つ前の状況を明らかにすることであり、それがここで歌われる苦難である（従って1節は切り離して、独立した導入句として読む方が良い）。エルサレムに向けての巡礼には、捕囚からの帰還、さらに出エジプトの出来事というイスラエルの歴史的な救済体験が反映し、それは苦悩の中から神に向かって導き出された経験を表す典型的・規範的なモチーフなのである。

2節から4節で「わたし」が苦しむのは、周囲から火矢のように浴びせ掛けられる、言葉による責苦である。「偽る唇」「欺く舌」は箴言でよく用いられる表現で、異邦人社会に取り囲まれたイスラエル離散民の受けた抑圧を物語ると同時に、共同体社会そのものに巢食ってこれを破壊する人間の罪性を代表する。よって、「わたし」の苦しみは必ずしも他人の言葉がもたらすものばかりではない。「わたし」自身が「偽る唇」「欺く舌」をもって裁きを招くこともある。3節による「主の報い」は、勇士の放つ鋭く尖った矢（複数）として、燃える炭火として、偽る者自身に振りかかる。矢も炭火も他人の罪を攻め立てる人の言葉を表すモチーフであるから、相手を攻撃する自分の言葉がそのまま自分に還ってくることになる。4節から5節の冒頭への繋がりは、

そのように神の裁きが敵に及ぶというばかりでなく、自分自身にも降りかかっているという連関となる。「わたし」の置かれた苦しみは、互いに責め合うことを余儀なくされた罪の世界に放置されていることなのだ。

5節から7節にかけて表されるのはそうした状況の認識である。「メシエク」と「ケダル」はそれぞれ小アジアとアラビア半島で距離的にかなり隔たっており、おそらく好戦的な民族の住む地域という象徴的な用法なのであろう。つまり「平和を憎む者」と同じ世界に住んでいることが「わたしの魂」の陥っている苦難の状況である。たとえ私が平和を語っても（「わたしが、平和を」という強調表現）、彼らは戦争を好む。互いに争いあう抜き差しならぬ世界の中で、「わたしの魂」は救いを求めて神に叫ぶ。その時、イスラエルの経験は、民の祈りに答える神を指し示し、その神の憐れみを信じる信仰者たちは信仰を杖として神に向かって巡礼の旅に出る。「わたしが呼べば主が答えてくださる」との確信が、この巡礼の始まりにある。

121編「^{たびだち}出発」

- 1 巡礼歌
わたしは目を上げる、山々に、
どこから来る、わたしの助け、
- 2 わたしの助けは主のもとから、
天と地をつくる方。
- 3 あなたの足をよろめかせないように、
あなたを守る方がまどろまないように。
- 4 見よ、まどろまず、眠らない、
イスラエルを守る方。
- 5 主はあなたを守る方、
主はあなたの蔭、
あなたのすぐ右手にある。

- 6 昼に太陽はあなたを撃たず
夜には月も。
- 7 主があなたを守る、
すべての災いから、
あなたの魂を守る。
- 8 主は守る、
あなたが発つのも還るのも、
今より永遠まで。

121編で歌われる信仰者の旅立ち、神へと向かう出発であって、ある注解者たちが想像するような別れの場面ではない。120編で描かれた争いの止まない罪の世界を後にして、信仰も新たに、眼差しを高く上げて歩み始める。

「山々」はパレスチナの特徴的な地形と一致する。それを、これから越えてゆくべき障害と受け取ることも出来る。旅には危険や困難が待ち構えている。その困難を前にして、巡礼者は「わたしの助け」を自問する。他方、山々は目指すべき都の位置する場所でもある(カルヴァン等)。そこで神と相見えるのが旅の目的である。わたしの助けはまさにそこから来る。詩人のまなざしは山々を見上げ、さらに山々を越えて天に及ぶ。神は天地を造られた創造者である。旅立ちの第一歩は、神の助けを静かに信じて踏み出される。

3節の言葉は第三者による祈りのことばであろう。或いは旅立ちに際して与えられる祭司の祝福とも考えられる。勿論、必ずしも祭司でなくともよい。子供を送り出す親かも知れず、弟子を送る教師かも知れない。信仰の仲間たちの願いでもある。神が彼の足取りを確かにしてくださるように、片時も目を離さず守ってくださるように一信仰者の旅の第一歩は自分の決心ばかりでなく、他から与えられる祝福がそこに伴う。

4節は、その祝福の祈りが旅立つ当人の確信を導いたのかも知れない。もしくは、3節の願いを踏まえた上での預言的な宣言である。神はまどろむことなく、眠ることなく、絶えずイスラエルを守っている。それはイスラエルの成員個々にも及ぶ神の加護を意味する。

5節から8節に告げられるのは、私の心に生まれた確信ではない。外から告

げられる神の約束である。それは神の確かさに支えられた祝福であって、この言葉が巡礼の旅そのものを支える。「主があなたを守る」と三度繰り返される。「守る」とは、5節・6節に表されるように様々な危険からの「保護」を意味するが、第一に「見守る」ことを指す言葉であって、神の注意深さがそこに意図されている。町の門に立つ夜警の仕事は、夜明けを待ちながら危険がないかどうか「見守る」ことである。また「戒めを守る」とは、その教えを大切に注意深く学び実行することである。そのようにして、神は旅路にあるわたしを守っておられる。

天地をつくられた方は、目を上げて遠くに見晴るかす彼方におられるのではない。確かに、その方を目指して「わたし」は旅に出る。しかし、私の見えぬところで神は実に近くある。5節にある「右の手」とは右側の手の届くところということだろう。そこに強い陽射しを遮る蔭のように神は立ってくださる。沙漠の陽射しは強く、直接それに当れば旅は続けられない。月が明るく空を支配する夜は、急激な冷え込みと共に災いを旅人にもたらす(と信じられていた)。しかし、すべての災いから主は守ってくださる(7節)。「災い」は「邪悪」としてもよい。「魂」はおそらく「あなた自身」ということ。

8節では「行きも帰りも」という表現で旅路の全体が指し示される。神は信仰者に一時的に加護を与えるのではない。実に人生の全体において「わたしを守る」方であり、まどろむことも、眠り込んでしまうこともない。この祝福は「今から永遠まで」を蔽い尽くす。すなわち、その祝福の中で旅は完遂され、巡礼者は聖なる都で神と出会う。

「今から」とは何時のことか。それは、この祝福を信じた時であろう。「主はあなたを守る」と語られたとき、これを信じるならば、神に守られてわたしたちは日々の生活にある。神への信頼が、巡礼の旅を支える唯一の杖となる。出発のとき、純真な心で神を信じた信頼が旅を全うする要であり、信仰者がいつもそこに立ち戻るべき原点である。この詩篇はその始点を示し続けている。

123編「旅の仲間」

一 巡礼歌。ダビデに(よせて)。

- わたしは嬉しかった、
人々がわたしに言ったとき、
「主の家に出かけよう」と。
- 二 わたしたちの足は立った、
エルサレム、あなたの城門の内に。
- 三 エルサレムは建てられた、
一つに結ばれた町として。
- 四 そこへ諸部族が上った、主の諸部族が、
イスラエルの証は、主の御名に感謝すること。
- 五 まことに、そこで
彼らは裁きの諸座に着いた、
ダビデの家の諸座に。
- 六 求めよ、エルサレムの平和を、
安らえ、あなたを愛する人々よ。
- 七 あなたの城砦に平和があるように、
あなたの王宮に平安があるように。
- 八 わたしの兄弟と友のため、
わたしは語ろう、平和があなたに、と。
- 九 われらの神、主の家のため、
わたしは願おう、良いことがあなたに、と。

第三番に当たる本編は旅の目的地であるエルサレムを主題としており、48・84編等と共に「シオンの歌」とも呼ばれる。エルサレムの都を表す語彙はことさら豊富で、2・3・6節に直接言及される他、「主の家」(1・9節)、「城門(複数)」(2節)・「建造物」(「建てられた」と意識)、「町」(3節)・「そこ」(4・5節)・「城砦」「王宮」(7節)・「あなた」(8・9節)と、各節に表出される。この全体が都であるエルサレムのイメージを形づくる。他方、巡礼の目的は地理的な移動ばかりではなく、旅そのものの神学的な意味とも関わる。それが本編のもう一つの主題であり、祈りでもある「和合」である。

「巡礼歌」では巡礼の旅が教訓的モチーフとして用いられていることは、これまで見て来た通りである。従って、多くの注解者たちのように、ここで歌われる巡礼の旅が過去のことか現在のことか歴史的に詮索しても始まらない。「巡礼歌」における個々の詩篇の成立には様々な背景がありうるが、一連の歌集としての編集は第二神殿時代(エズラ・ネヘミヤ以降)と考えてよい十分な理由がある。本編の神学的な主題は「和合」であり、1節に表現される通り、それが旅の道中から与えられている。

シオンを目指す巡礼の旅には道連れがある。「(わたしたちは)主の家に出かけよう」との志は(1節)、孤独な決意というよりも、ここでは仲間たちと連れ立っての楽しい企てである。そして、エルサレムに到着するのも、彼らと共にである(2節)。「わたしは嬉しかった」のは、この2節にまでかかると読んでもよい。仲間たちと共に立つこの喜びは、エルサレムの特質として描かれる。読解の難しい箇所であるが、「一つに結ばれた町」(3節)とは、城壁に囲まれた内部を居住区が密集する町の構造を表すとも考えられるが、ここでは4節の意を汲んで民族結集の象徴的表現と理解した。エルサレムはイスラエル十二部族の統一聖所が置かれた都であり、神の契約を担ったダビデの王座が置かれた場所であった。5節で座に着くのは歴史的には歴代の王たちであろうが、ここでは終末的観点からイスラエル十二部族がそれぞれ相應しい座に着くことが歌われていると見ることもできる。エルサレムは過去から未来に渡るイスラエルの荣誉である。エルサレムに足を踏み入れた「わたしたち」は、主によって召集された十二部族の一員であることを自覚し、主に感謝をささげることでイスラエルの証を立てる(4節)。巡礼の旅の目的は、ここにおいて「一つに結ばれる」喜びが成就することにある。

6節からはエルサレムにささげられる祈りである。「あなた」と呼びかけられているのはすべてエルサレムの都であり、「平和(シャローム)」と「平安(シャルヴァー)」が祈願される。巡礼の先に期待されているのは、只の神殿の建物ではなく、神が支配されるところの平和である。世界に散らされた兄弟姉妹が一同に集い、心も身体も平穏な(シャルヴァー)喜びに満たされる時、初めて旅は完結する。けれども巡礼の旅は絶えず繰り返されるがゆえに巡礼なのだ。神の定めた時が満ちるまで、イスラエルの巡礼の旅は終わらな

い。エルサレムを巡って諸民族が分裂し、土地を奪い合う現実は今日に至るまで代わらない。本編が記すエルサレムの平和は、地上を旅する神の民の永遠の祈りである。ただ、その丘の上には十字架が立つ。真に兄弟姉妹と一緒に結んで平和と安息をもたらす約束が、新約の時代の確かな希望として我々に差し出されている。

125編「復興」

一 巡礼歌

主がシオンの復興を果たされて、
わたしたちは夢を見るかのよう。

二 そのとき、わたしたちの口は笑いに満ちた、 わたしたちの舌は歓びに。

そのとき、諸国民は言った、
主はこの人々に大きなことをされた。

三 主はわたしたちに大きなことをされ、 わたしたちは嬉しかった。

四 復興してください、主よ、わたしたちを、 ネゲブを流れる川々のように。

五 涙のうちに種播く人々は、 歓びのうちに刈り入れるでしょう。

六 種袋を背負って、泣きながら出て行っても、 穂束を背負って、歓びながら帰って来ます。

第7番はシオンの復興を明瞭に歌う。「復興」は「帰還」とも読める。ユダヤの伝統では後者の理解が民衆に好まれた。歴史的な核はペルシャ時代に実現したバビロン捕囚からの解放の出来事であり、それがエルサレム神殿の復興に焦点が当てられるか、エルサレムへの帰還に強調が置かれるかの相違となる。

前半の段落1-3節は、かつて起こった出来事の想起であり、これが新たな救いの根拠となるという構造は詩篇85編と共通する。1節に歌われるようシ

オンの復興はイスラエルの夢である。バビロニアのネブカドネツアルによって破壊された神殿は、捕囚から帰還した民によって再びシオンの丘に立つ。それは神の裁きを経験して悔改めた民の、神の民が再生する新しい希望となった。2節はその喜びを「そのとき」という語を行頭に置いて二通りに表現する。もはや夢ではなくなった解放は、まずイスラエルの民の苦痛に強張った「口と舌」を明るく笑いと神賛美へと解き放つ。「歓び（リンナー）」は「歓声、歓呼」を指し、賛歌の詩篇で多く用いられる表現であって、本詩篇のキーワードである。そしてイスラエルの歓声は周辺諸国にも聞こえるところとなり、真の神の業が外部にも認知され、異邦人の口を通して証言される。「これら（の人々）」という表現は、「こんなもの」という卑小辞とも理解される。大国に蹂躪されて亡国の民となったイスラエルは、「お前たちの神はどこにいる」との他国民の嘲笑に晒されてきた。しかし神は、戦勝国の栄光の中にではなく、そんな低められた人間のところに偉大な業を果たされる。2節のこうした構造は、賛歌の詩篇にみる宣教の構造とみなすことが出来る。そして3節は、「主はわたしたちに大きなことをされた」と自ら繰り返すことで、夢が実現した喜びを率直に表明する。この前半が、イスラエルの経験した救済の出来事であり、神の真実の原体験である。これがイスラエルの信仰の中核となって民の旅路を支えている。

127編「再建」

一 巡礼歌。ソロモンに（よせて）。

もしも主が家を建てるのでないなら
それを建てる者らは労して空しい。

もしも主が町を護るのでないなら
護る者は見張っていて空しい。

二 あなたがたは空しく、 早朝に起き立ち、遅くなって席につき、 労苦のパンを食べる、 まさに、主は御自分の愛しい者に 睡眠を与えてくださる。

- 三 見よ、主の嗣業は息子たち
報酬は胎の実り。
- 四 勇士の手にある矢のような
まさに、若き日の息子たち。
- 五 幸いだ、その男は、
自分の箎をそれらで満たす。
彼らは恥をかかない、
まことに、門では敵を退ける。

「ソロモンに」と標題にあるのは、本編を除けば72篇だけである。カルヴァンのように標題の著者性に固執する必要は無い。1節の「家」とは「神殿」をも意味することから、神殿の建設との連想でソロモンが引き合いに出されたのであろう。ヴァイザーは箴言との関わりからソロモンの意味を問う。本編の主題は、箴言10章22節に端的に表明される。「人間を豊かにするのは主の祝福である。人間が苦勞しても何も加えることはできない」。確かに本編は語法からしても「祈願」や「賛歌」ではない。主なる神への直接の訴えはなされておらず、むしろ日々苦勞して働く「あなたがた」への教訓となっている(2節)。1節や3節はそのまま箴言に採用されてもおかしくはない。しかし、ヴァイザーが「根拠なし」と否定するように、ソロモンと神殿との関連や、その他の歴史的な出来事との結びつきを全く顧みないのは乱暴であろう。本編はソロモンの第一神殿建設を想起することが可能であるし、それ以上に帰還後の第二神殿建設についてのネヘミヤの記述を彷彿とさせる。「天にいます神御自ら、わたしたちにこの工事を成功させてくださる。その僕であるわたしたちは立ち上がって町を再建する。」(2章20節)。126編ではシオンへの帰還が導入のモチーフとなり、それが後半の格言と結びついて個別の事象を超えた主の救いの経綸が示されていたが、同様の構造が本編にも認められる。即ち、「神殿建設／再建」という国民的なモチーフを用いながら、詩の言語的特性を十分に生かして、「神殿／家(家庭)」の交代によって、イスラエルの経綸が個々の信仰生活に適用される。巡礼の旅は帰還から神殿再建へ進み、

それに併せて現在の信仰者たちの信仰生活の指針がここに提示される。

130 編「待望」

- 一 巡礼歌
深淵よりわたしは呼びます、主、あなたを。
- 二 わが主よ、聞いてください、わたしの声を。
耳を傾けてください、わたしの切なる声に。
- 三 主、あなたが諸々の咎に目を留めるなら、
わが主よ、誰が立っていられましょう。
- 四 まことに、あなたには赦しがあります、
あなたが畏れられるために。
- 五 わたしは主を待ち焦がれ、
わたしの魂は待ち焦がれ、
その言葉を待ち望みます。
- 六 わたしの魂が主を・・・
夜警が朝を待つよりも、
夜警が朝を待つよりも。
- 七 主を待ち望め、イスラエル、
まことに、主には慈しみが、
贖いがふんだんにある。
- 八 彼こそイスラエルを贖う、
すべての咎より。

第11番。主題としては前半(1-4節)と後半(5-8節)の二部に分かれ、特に後半のテーマとなる「待望」は、本編から続く三つの歌をして巡礼歌のクライマックス(134、135編)を準備する。本編はルターが「パウロ的」と呼んで最高の詩編に位置付けたものである。ここには、罪の深みにおいて全

くの恩恵として立ち現れてくる赦しと救いの確信が「繊細な感受性と単純で誠実な言葉」(ヴァイザー)で明瞭に表される。これは、130編ひとつが表現するのではなしに、これ以降の歌の脈絡に表明されている教理であろう。罪の絶望から恵みによって贖われ、救われた喜びが神殿で会衆と共にする礼拝において満ち溢れる。罪の深刻さと恵みの確かさが一体となったパウロの使信は、こうした詩編の言葉によって支えられている。

冒頭に置かれた「深淵」は、通例では海の深みを表す(イザヤ書51章10節等)。そこは死が間近に迫った光の届かない場所であり、神と人との関係が断絶していることを暗示する。ここで内面化された「深淵」は、詩編22編冒頭にある神から見捨てられた者の絶望に相当する。「わたし」が経験したのは、わたしの罪に起因する神との断絶である。本当の絶望は、そこで祈れないことであろう。「際限もないと思われる惨めさは、しばしば絶望を生み出すものなので、人が大きく深い悲しみに巻き込まれているとき、祈りへと立ち上がる以上に難しいことはない」(カルヴァン)。しかし詩編は、そこでこそ我々に代わって嘆きを発し、我々を祈りの言葉へと導いてくれる。

3節前半句の「目を留める」とは注意深く見守ることで、6節の「夜警」に対応する。神が私の罪を見張っておられることは耐え難く、御前に真直ぐ立ってはおれない。しかし、神が私に無関心であっては、罪の深淵から救われるべくもない。望みは「赦し」にある。神は「わが主(アドナイ)」であって、僕(しもべ)の罪を知りつつもこれを赦すことのできるお方である。これが罪の深みにおいて神がご自身を示される仕方であり、信仰の要である。4節後半句は難しいが、「赦し」によって主は畏れられ、崇められるということであろう。即ち、「赦し」は神の栄光なのだ。

5・6節の待望も、4節から理解される。主のもとには「赦し」があり、それを信じて「わたし」は祈る。待ち望むのは、その赦しが「言葉」として告げられることである。喩えとして引き出された「夜警」は、巡礼歌に共通するモチーフである。朝の光を待ちつづける夜警たちの姿に、御言葉の到来を待つ信仰者の情熱と忍耐が投影される。それは希望のない忍耐ではない。太陽が必ず上るように、主は御言葉と共に必ず到来する。

最後の2節で会衆に呼びかけられるのは、「赦し」と共にある、「慈しみ(へ

セド)」と「贖い」である。「贖い」とは「賠償金」を指し、「豊かに」「ふんだんに」と形容される所以である。そして8節に宣言されるごとく、主がすべての咎より民を贖うと約束される。「深淵より」嘆き訴えた「わたし」は、ここで「すべての咎より」贖われると約束され、祈りは聴き届けられて、終りの日の主の到来を待ち望む。

尚、「祈りの旅」の目的地は、133・134編をお読みいただければ十分であろう。朝に夕に喜びと感謝をもって捧げられる神殿での礼拝がそこにある。詩編の導く先は、キリスト者にとっても兄弟姉妹たちの集う主日礼拝に結びつき、新約の光によって、そこに黙示録が提示する天上の礼拝にまで辿り行く。「巡礼歌」は嘆き・告白・感謝・賛美の言葉を豊かに蓄えつつ、信仰者を祈りにおいて神と結ぶための教導役を果たす。天の御国へ帰り着くまで、旅の友となってくれる日毎の御言葉がここにある⁴。

主要文献

- ・A・ヴァイザー/大友陽子訳『詩篇下90-150篇ATD旧約聖書註解』(ATD・NTD聖書註解刊行会、1987年)
- ・勝原弘也『リーフ・バイブル・コメンタリーシリーズ 詩篇註解』(日本基督教団宣教委員会、1992)
- ・カルヴァン/出村彰訳『旧約聖書註解詩篇IV』(新教出版社、1974年)
- ・榊原康夫「詩篇90-150」『新聖書注解・旧約3』(いのちのことば社、1975年)287~386頁
- ・フランシスコ会聖書研究所訳注『詩篇』(中央出版社、1968年)
- ・松田伊作訳『旧約聖書XI詩編』(岩波書店、1998年)
- ・Hans-J. Kraus, *Psalmen 1-59: BK XV/1*, (Neukirchener: 1978); *Psalmen 60-150: BK XV/2*, (Neukirchener, 1978).
- ・Amos Hakham, *Book of Tehilim: Da 'at Miqra*, vol.2, (Jerusalem,1979).[Hebrew]

(日本キリスト改革派・千里教会牧師)

⁴ 本稿は日本キリスト改革派千里山教会の祈祷会で行った「詩編講解」に基づいており、120~134編全体を既に読了済みである。各編の解説は、いずれどこかで纏めておきたいと考えている。

「祈りの旅」を詩篇と共に